

第一章

私が瑛太先輩、央介先輩と出会ったのは、高校に入学してしばらく経ったある日のこと。もうすぐ夏になりそうな、けどまだ涼しい風が吹く、そんな季節のことだった。私は誰にも言ったことがない、いや言えるようなことでもないが、とにかく性欲が強い。学校にいる時でさえ昂りが抑えられず、トイレに籠って欲を満たすこともあった。そんなある日、屋上の鍵が開いていることに気が付いた。なぜ気が付いたのかというと、廊下掃除の当番になり階段を掃き掃除している時に屋上の扉が少し開いているのを見つけたのだ。私にとってこんな都合な場所はない。すぐに屋上は、私の秘密の場所になった。あの日もいつも通り、欲を発散させようと屋上に小走りで向かっていた。

＊

ギイ——……

昼休み、先生に呼ばれたからと友達に嘘をついて屋上へやってきた。屋上の扉が錆びついた音を立てる。しっかり鍵をかけたことを確認し、いつもの定位置へ座る。ちょうど陰になって涼しく、しかも万が一扉が開いてしまっても死角になっ
て見えない場所。

「んっ♡はあ…♡もうパンツびちよびちよになっちゃった…♡」

ゆっくりとパンツの中に手を差し込み、秘部の入り口を撫でると、既にそこはぐっしりと濡れていた。少し浅いところを慣らした後、ゆっくりと二本指を膣へ挿し込んでいく。

「んああ…っはああ、っあ、…あっ♡」

膣に挿入した指をぐちゅぐちゅと往復させながら、あいている方の手でクリトリスのてっぺんを擦る。やっと昂る秘部を触れた高揚感からどんどん指が激しく動き、内ももがびくびくと痙攣し始める。あと少しで絶頂する…その時、がたと物音がして、びくっと体が跳ねた。

「あっ…えっ…」

確かに鍵はかけたはずなのに…。音の正体を探すためきよろきよろと辺りを見

回すと、男の人の声が聞こえてきた。

「ほら…瑛太が押すからバレちゃったでしょ？」

「ごめんって～！俺だって近くで見たかったんだからしょーがねえじゃん！」

陰から現れたのは二人の男の子だった。瑛太、と呼ばれた男の子はかき上げられた前髪に短いつんつんした髪、切れ長な釣り目で少し怖そうな見た目。もう一人はさらさらとした黒髪で、優しそうな男の子だ。履いているスリッパが赤いということは、二年生…先輩だ。

「やっ…あ、あっ…」

一部始終を見られていたという恥ずかしさから後ずさりして逃げようと試みるが、後ろは壁だ。しかも、二人の男の子に囲まれては逃げる場所もない。

「あー、ごめんね。怖がらせるつもりはなかったんだけど…。君、一年生だよ。名前は何？」

「う、うみか、です…。」

黒髪の男の子に尋ねられ、小さな声で答える。二人は私の前にしゃがむと、俯く私の顔を覗き込んできた。

「海歌かり！ お前、こんなところで一人でオナってるとか淫乱なの？」

「なっ…い…っ！」

あまりにもストレートに言われてしまって、顔に熱が集まる。勝手に見るなんて！ と怒りたくなる気持ちもあったが、こんな所で自慰をしている私も良くないことは分かっているため、あまり強く言えない。

「おい、瑛太。そういうこと言うなよ。海歌ちゃん困ってるじゃん。ごめんね？ 海歌ちゃん。」

「あっ…い、いえ…大丈夫です…。」

「俺の名前は央介。で、こっちが瑛太。」

央介先輩はにこにこ優しい笑顔で自己紹介してくれた。なんだかい人そう。そう思ったのも束の間、央介先輩はずいっとスマホの画面を目の前に突き出してきた。

「これ、見て？」

「…？ …っ!!」

央介先輩に差し出されたスマホの画面には、私が一人で秘部を慰めている姿が

映されていた。さっきの、動画に撮られてたんだ。どうしよう、なんて言って消してもらえば…と頭の中がぐるぐると忙しく回る。

「海歌ちゃん、これ、他の人に見られたくないよね？」

「はっ、はい…。」

「そうだよ。じゃあ…海歌ちゃんが俺たちのペットになってくれるなら、誰にも見せないで内緒にしてあげる。どう？」

「えっ…えっ!？」

予想外すぎる央介先輩の提案に思わず声が上がずる。ペット、なんて人間に使う言葉ではないはずだし、そんな言葉で興奮するのもおかしいことだと分かっている。分かっているはずなのに、じわじわと秘部が熱くなるのを感じる。

「おい央介！お前も海歌ちゃん困らせてんじゃん。」

「えっ？ 海歌ちゃん、困ってないよね？ 俺にペットって言われて、嬉しそうに目とろろんってさせてるじゃん。ね、むしろペットになりたいんじゃない？」

央介先輩に言われて、咄嗟に顔を隠す。心の中だけで思っていたはずなのに、顔に出ていたなんて。

「んゝまあ確かに…なんか面白そうだし…海歌ちゃんきもちーことすっげえ好きそうだし♡さっき寸止め食らって、今ムラムラしてんじゃねーの？俺たちのペットになったら、海歌の雑魚まんこいっぱいほじってやるよ♡」

私のそばにしゃがんだ瑛太先輩に耳元で囁かれ、びくっと体が跳ねる。自分で触るのでさえ気持ちいいのに、誰かに、しかも二人にいじめられたらどれだけ気持ちいいのだろう。考えただけで、秘部からじゅわっと愛液が垂れる。いや、これは動画を晒されないため、別にペットになりたいわけじゃない、仕方なくだ。そう自分に言い聞かせ先輩たちの問いに答えた。

「なっ、なります…先輩たちの、ペットに…♡」

＊

先輩たちのペットになると宣言した昼休み。その後、放課後に部室棟の一番奥の部室へ来るよう言われた。イク寸前でお預けを食らってしまった私は、午後の授業に集中できるわけもなく、頭の中はエッチなこといっぱいだった。何とか

授業をやり過ごし、約束の放課後。先輩たちに指示された部室の前へやってきた。コンコンと扉をノックするが返事はない。ゆっくり扉を開けると、先輩たちの姿はなかった。

「まだ来てないのか…。」

部室の中は普通の部屋のような雰囲気で、大きなソファにテレビ、ゲームなど学校では必要のなさそうな物がたくさん揃っていた。部屋の中を見回していると、後ろで扉の開く音とともに聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あれ、海歌ちゃんもう来てたんだ。」

「あれだろ、ムラムラして早く犯してほしかったんだろ？ な、海歌？」

瑛太先輩と央介先輩だ。私はまだ完全に今の状況を受け止め切れているわけではないのに、肝心の二人は何も気にしていない様子だ。瑛太先輩に関してはすでに私のことを呼び捨てしている。

「えっと、あの…ペットって、具体的に、何をしたら…」

私は一番気になっていたことを早速聞いた。午後の授業中もペットになったら何をさせられるのか、嫌でも想像してしまい、パンツはじっとりと濡れてしまっ

ていた。

「んゝそうだなあ…まあ、立ちながら喋るのもあれだし、座ってお話ししよつか？」

央介先輩に促され、ソファに腰を掛ける。端っこに座ったのにぐっと中央に寄せられ、先輩たちに挟まれて座る形になってしまった。

「あつ、あの…ち、ちかい、です…。」

「ペットって言ったらやっぱ…こういうことじゃね？」

瑛太先輩の手がスカートの中に入り、太ももを撫でる。するすると奥に入り込み、秘部の際をさわさわと指先で撫でられる。

「ん、ふああ…♡」

「あと…こことかもかな？」

反対側にいる央介先輩はワイシャツのボタンの隙間に指を差し込み、胸のてっぺんのすぐそばを焦らすように指先で撫でた。昼休みからずっと大きな欲を抱えていた私は、そんな些細な刺激にもびくびくと体を震わせながら感じてしまう。

「やつ、♡だめ、です…♡」

「なんで？ 海歌ちゃんが自分で俺たちのペットになるって言ったんでしょ？」

「おおお♡ら、めえ♡」

ワイシャツの中で下着を下へとずらされる。瑛太先輩には、スカートの裾をく
るくるとウエストに巻きつけられ、パンツが丸見えになるような格好にさせられ
てしまった。

「あっ♡だめ、♡みえちゃ…♡」

「あれ？ 海歌のパンツの真ん中、ちょこんってちっちえ♡山できてんだけど
♡これなに？」

「おほおおお♡おっ♡」

パンツの中でびんびんに勃起したクリトリスのてっぺんをちょんちょん、と指
先で突かれる。その刺激でとぶうっと愛液が零れ、パンツに大きなシミができる。

「ほら、見ろよ央介♡パンツもびっちょびちょ♡」

「ほんとだ！でもこっちには二つもお山できてるよ？ シャツの上からでもよく
分かる。」

「おおっ♡♡だめ♡どっちも、されたら♡すぐイっちゃ…♡♡」

瑛太先輩にクリトリスの先をちょんちょんとされながら、央介先輩に両乳首の先端をすりすりと擦られる。まだ先っぼだけなのに、面白いくらいに腰がびくと跳ねてしまう。

「海歌こんなんデイクの？ クソ雑魚じゃん♡」

「こら、瑛太。女の子にそんなこと言わないの。ほら海歌ちゃん、イっていいよ？ 勃起クリと乳首いじられてイケ。」

「イク♡あっ…♡イっぐう♡♡」

お尻が浮き、がくがくと腰から太ももまで痙攣する。パンツはもう履いている意味がないほどぐっしりと濡れてしまっていた。

「海歌ちゃん、やっつとイケてよかったね。ずっと我慢してたもんね？」

「あっ…♡はあ…♡♡」

「海歌、パンツぐちょぐちょじゃん！ 気持ちわりいだろうから脱いどこうな」

♡

絶頂の余韻に肩を上下させながら大きく息をついていると、瑛太先輩に濡れたパンツを脱がされてしまった。瑛太先輩はばいっと床にパンツを置くと、私の足

を大きく開いた。

「あっ♡やあ…♡」

瑛太先輩は愛液に濡れた秘部の入り口を指先で往復し、ぬちよぬちよと水音をたてる。

「海歌のイキたてまんこひくひくしてんじゃん♡ちんこおねだりしてるみてえ♡
なあ、もう挿れていい？」

「やっ♡あっ…♡ああ…♡」

瑛太先輩にイッたばかりのクリトリスを擦られながら挿入のおねだりをされるが、口からは嬌声が漏れるばかりでなかなか返事ができない。すると、央介先輩が反対側から瑛太先輩に少し怒気の籠った声で言葉をかけた。

「ねえ、なんで瑛太が先に挿れることになってるわけ？ 俺だって先に挿れる権利あるでしょ？」

「はあ…？ それだったら俺にだって権利あんだろ？」

二人はどちらが先に挿入するのか、で言い争いを続けている。その真ん中に座る私には口を挟む隙もなく、あわあわと二人の顔を交互に見ていると、央介先輩

と目が合った。央介先輩は一瞬考え事をするような素振りを見せた後、何か閃いたようにでにこっと私に笑いかけた。

「いいこと思いついた。海歌ちゃんに決めてもらおうよ。」

「はあ？ 海歌に？ どうやって？」

「俺たちが同時に責めて、どっちが気持ちよかったかで決めてもらうんだよ。」

央介先輩の手のひらがすると太ももを撫でながら上に上がっていったかと思うと、クリトリスの側面にぴとっと指先を添えて動きが止まった。瑛太先輩は央介先輩の考えを察したようで、にやっと笑うと反対側のクリトリスの側面に指先を添えた。

「ふーん、面白そうじゃん♡ぜってえ俺の方が気持ちいいって言わせてやる♡」

「おっ♡おっ♡おっ♡♡♡」

クリトリスの側面に添えられた指先がカリカリと動き始める。先輩たちの爪先で、勃起したクリトリスを容赦なく引っ掻かれ、両側から押しつぶされる。あまりの刺激に腰を逃がそうとするが、両側からがっちり固定されて快楽を逃がすことはできない。

「ほら、海歌ちゃん。勃起クリぐりぐりっていじめてもらえて嬉しいね？ 俺の指で弄ってもらう方が気持ちいいよね？」

「俺の方がきもちーよな？ ほら、俺って言え♡」

「やっ♡やああ♡」

央介先輩にクリトリスを陰茎のようにしこしこ扱かれ、その先っぽを瑛太先輩に二本指でこすこすと高速で擦られる。もうどちらの指から与えられる刺激で感じているのかも分からず、ただ喘ぎ声をあげながら広げた足をがくと震わせることしかできない。

「あっ…♡も、わかんない♡んああ♡あ…♡」

「あゝそっか。クリちゃんぽだけじゃなくて乳首も触ってほしかった？ ごめんね、海歌ちゃん。気づいてあげられなくて…」

央介先輩はクリトリスをしこしこと扱う動きを続けながら、もう片方の手でびんびんに勃起上がった乳首も陰茎のようにしこしこ扱き始めた。

「あゝ央介だけずりい！」

そう言った瑛太先輩は反対の乳首をかりかりと指先で弾き始めた。剥き出しに

なったクリトリスを弄られるだけでも十分快感だったのに、更に乳首まで責められれば絶頂を我慢することなどできるはずもなく、太ももを大きく痙攣させながら嬌声をあげてしまった。

「ああああ♡イツ、く…♡クリと、ちくび♡イキましゅ♡イク♡イク♡あっあっ♡……っ♡」

「海歌ちゃん、どっちの指が気持ちよかった？」

「俺だよな？ 海歌♡」

両耳から低く甘い声で囁かれる。二人の声がぞくぞくと体の中を走り、絶頂の余韻も相まって、体がびくびくと震える。

「あっ♡わかんない…どっちも♡」

「えーどっちも？ しょうがないなあ…可愛い海歌ちゃんが見れたし、今回は瑛太に譲るよ。」

「まじ!? やりい！」

先輩たちはソファからおりると、私をソファに寝かせた。瑛太先輩は私の足元へ、央介先輩は顔の横へ移動してきた。先輩たちがカチャカチャとベルトを外し、

パンツから陰茎を取り出す。瑛太先輩の陰茎がべちんと秘部を叩き、央介先輩の陰茎は頬を叩く。先輩たちの陰茎の重さ、熱さ、匂いを感じるだけで秘部がじわっと熱くなる。

「んああ…♡ま、まって…♡」

「海歌ちゃんのお口まんこ使わせてね？」

唇と秘部の入り口に陰茎の先をぴとと当てられ、熱いものが一気に挿入される。

「あっ♡やつ…♡っお、おっ…♡んん♡んん…♡」

喉と膣の奥で感じる初めての感覚に、頭の中が沸騰するように熱くなる。少しの痛みの中に感じる大きな快楽に、激しい嬌声が出そうになるが、央介先輩の陰茎に口を塞がれて思うように声が出ない。この苦しさにすらも気持ちよさを感じてしまう。

「あゝ海歌のまんこぎゅうぎゅうできもちい♡突くたびにクリちんぽびよこしてんのかわい♡」

「んっぐう…♡…ん、ううう…っ♡」

瑛太先輩に奥をずんずんと突かれながら、クリトリスをきゅっとなまめれる。

何度もイカされて真っ赤に腫れたクリトリスを急に強くつままれ、子宮が精子を求めるようにきゅんきゅんと疼く。

「乳首も扱いてほしいって一生懸命勃起してアピールしてきてるよ。」

「ん、♡んううう♡あ……♡」

央介先輩に勃起した乳首の先端を指の腹ですりすりと擦られる。

「ぐ、……♡♡ああ……♡んっ、ぐう……♡あ、♡ああ♡」

「は、……♡♡乳首とクリで感じすぎじゃね？ まんこぎゅんぎゅん締め付けてくんだけど♡あ♡♡海歌の雑魚まんこでイキそ♡」

瑛太先輩のピストンが更に速くなる。ごちゅごちゅと激しく奥を突かれ、体が大きく揺れる。それに合わせて、央介先輩の指が私の両乳首をぐうっとなに引張り、その先端を指先でカリカリと捏ね回し始める。

「ん、ぐううう……♡♡お、ぐ♡っ♡♡あっ、……♡っ!!♡♡」

イク瞬間にぎゅうっとな層強く乳首を捻られ、びくんと体を痙攣させながら激しい絶頂を迎えた。その瞬間、瑛太先輩の陰茎がびくびくと脈打ち、精液をどく

どくと吐き出されているのを感じる。

「乳首ぎゅってされてイっちゃうなんて、海歌ちゃんって淫乱なんだね。ほら、まだ終わりじゃないよ？ 次は俺の番。」

「んんっ♡」

ずるっと膣から瑛太先輩の陰茎を引き抜かれる。まるで出ていかないで、とでも言うように自然と腰がへこへこ出ていく陰茎に合わせて動いてしまう。瑛太先輩と中央先輩は位置を入れ替わり、休む間もなく中央先輩の陰茎が秘部へ押し当てられる。

「あ、ああ……っ♡は、……っ♡おあ……っ♡……っああ♡」

ずぶずぶと中央先輩の陰茎を挿入される。膣中までぐちょぐちょに濡れていることもあり、なんの突っかかりもなく最奥まで一気にたどり着いた。

「今度は俺が乳首スイッチ押してやるよ♡」

「ああっ♡あ、……っ♡せんば、だ……めっ♡ちくび、きもち、……っ♡」

今度は瑛太先輩に乳首を人差し指と親指でつまみながら、上下にしこしこ動かされる。

と雑魚マンいじめられて連続アクメキメろ」

瑛太先輩は央介先輩の言葉を聞くと、勃起乳首をぢゅうと勢いよく吸い上げると、また先端を八重歯で甘噛みしながら反対側の乳首をしこしこと扱き続けた。央介先輩のピストンが速くなり、ごちゅごちゅと子宮を刺激される。

「んおろろっ♡ち、くび、っ♡キクっ♡イっ♡イっ、ぐ♡イクっ♡イっ、くろくく♡」

びくびくびくびくっ

乳首と膣奥を追い立てられ、激しい絶頂を迎える。それと同時に央介先輩も絶頂を迎え、精液を最奥へぶちまけた後もゆるゆると腰を動かし陰茎を奥へ擦りつける。

「お、♡おおっ♡おろろ……っ♡」

自分でする時よりも何倍もの気持ちよさに目の前がバチバチして、なかなか絶頂からおりてこれない。腰がガクガクと震え、嬌声が漏れ続ける。

「おろい、海歌だいじょぶ？ 意識どっかにとんでたんじゃね？ ♡」

「どう？ 海歌ちゃん、ペットになるってどういふことか分かった？」

先輩たちはまだイっている最中なのに、よくできましたとでも言うように、乳首とクリトリスをよしよしと撫でまわしてくる。

「っあ、♡わ、かりました、……っ！ ♡」

「海歌ちゃんはお利口なワンちゃんだね。いい？ 俺たちが呼んだら絶対にすぐ来ること、分かった？」

「……っひあ♡は、はいい♡…っ♡」

こうして、私のペットとしての学校生活が始まったのだった。